



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜報. 天界 1925, 5(52): 152-154

ISSUE DATE:

1925-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160243>

RIGHT:

# 雜報

## ●小遊星の近況

最近、ベルリンの計算局よりの報導によれば、昨一九二四年(大正十三年)六月末までに原簿に登録されて、別々の小遊星たることを公けに認められたもの、數は一千〇二十四個となつた。尙、近頃の發見者は、やはり、ドイツのハイデルベルヒ天文臺や、オーストリのワインや、ロシアのシメイス(Симейс)天文臺などが主なものであるが、二三年前から、米國ヤーキース(Yerkes)天文臺のアンブリスブルク(Van Biesbroeck)氏が二十四吋反射鏡を以つて可なりの成績を挙げ、既に二十個程を發見したといふ。(山本)

## ●小遊星の發見符號改正

歐洲戰爭前までは、新しい小遊星の發見は總てベルリンの中央局に届け出て、そこで秩序よく整理せられ、一定の符號を付けられることとなつてゐた。(詳しくは天界第二號を見られよ)しかるに、戰爭が起つてからは、通信が困難となつて、中央局に届出ることが不便を増して來たのと、其の他彼我の國際的

感情が圓滿な欠いたため、新小遊星に關する事柄の取り扱ひが頗るまち／＼になつた。例へば、獨逸諸國で發見された場合には依然としてベルリンの中央局に届出たけれど、ロシアのシメイス天文臺では自分の所で發見した星のみに  $M_1, M_2, M_3, \dots$  といふ風の符號を用ゐ又、アルジホール(Algol)あたりで發見されたものには 1918, 1919, 1920, ... 杯を勝手な符號が付けられ、米國ワシントンでは  $W_1, W_2, \dots$  とし、又、ヤーキースでは  $Y_01, Y_02, \dots$  として發表するやうにもなつた。それに、長い間、ベルリンの中央局で用ゐてゐた符號も決して立派なものではなく、いろ／＼不都合なことがあつたりするので、一九二三年の夏、ワシントンのパワー(A. B. Power)氏はベルリンの中央局長に手紙を送つて發見符號の改正を促した。ところが、會々中央計算局長ベルリヒ氏が逝去したものでから之れは暫く懸案になつてゐたのを近頃、A コップ氏が局長に新任されるに及び、いよいよパワー氏の提案を採用し、少しく改良を加へて、一九二五年度から實際に用ゐられることになつた。

今回の新法によれば、新たに發見された小

二〇

遊星は、今までの如くに  $1925\text{B}10$  など、發見年號の次に大ローマ字を二つ付けて呼ばれるのであるが、此の二つのローマ字の意味が全然前のとは違ふのである。即ち、二つの中の始めのローマ字(上の例の B)は發見の時季を表はし、次ぎの字は其の一定の時季中の順序を表はすこととなるのである。そして、始めのローマ字の示す時季としては

發が見一月一日から十五日までならば A  
同 十六日から月末までならば B  
同 二月一日から十五日までならば C  
同 十六日から月末までならば D  
.....  
十二月十六日から月末までならば Y

とし、又、右の各半月中の發見順序として、第二のローマ字の示す意味は

一二三四五... 當世世世... 平平... 五三...  
A B C D E... Y Z A<sub>1</sub> B<sub>2</sub>... Z<sub>1</sub> A<sub>2</sub> B<sub>3</sub>...  
とするのである。例へば 1925 B<sub>2</sub> Z<sub>1</sub> と言へば、之れは「一九二五年の三月一日から十五日までの間に發見された小遊星の中の第二十三番目のものである」といふ意味となる。

暫くは、何だか複雑なやうであるが、漸次

慣れ、ば便利な方法と思はれるやうになるだらう。(山本)

### ●宮中で天文學御聽講

東宮、同妃兩殿下は去る三月二十八日から四月四日までの間に、東京天文臺長平山信博士を召させられ、數回にわたつて、天文學に關する御進講をきこし召された。正に學界の慶事と言はねばならぬ。

### ●博覽會内に天文部

田所美治氏を會長とする京阪教育博覽會は去る四月一日から大阪府北河内郡牧方町に開場せられ、來る六月半ば頃まで繼續される筈であるが、京大の山本教授は歸朝早々依囑を受けて、場内に天文學上の陳列に關する世話をやいて居る。其の主なものば場内の智育館にあるもので、中にも、運轉する星空の模型と太陽系統の大模型とは同教授の工案になる苦心の作で、大きさ何れも數十尺に擴がり、館内を壓してゐる。又、別の棚には海外から持ち歸られた大きな天體寫眞を多く掲げ、尙其の傍には同教授作の世界最大望遠鏡模型を列べてある。近日中に、場内の丘上に小屋を建て、四吋級の赤道儀を据ゑて、夜間の實際觀察が行はれる筈。

### ●ナルフ教授の新週期彗星

獨逸ハイデルベルヒ天文臺長マクス・ナルフ(Max Wolf)教授は昨年十二月二十二日牡牛の星座に運動する星雲狀の一天體を發見したが、其の後、各地で行はれた觀測の結果、之は彗星とわかり、しかも其の軌道は可なり短週期的のものであると近頃知れた。年末の十二月二十二日(ハイデルベルヒ觀測)と同年二月六日(ケリンキチで觀測)と、今年一月十三日(ハイデルベルヒで)との三回の觀測位置から英國ケリンキチ天文臺のクロンメリン(A. C. D. Crommelin)氏が研究したところによると此の彗星の軌道要素は

近日點通過  $T = 1925 \text{ Jan. } 23.9624 \text{ G.}$

M. T. (ケリンキチ發見時)

近日點進度  $\omega = 184^\circ 8' 27''$

昇交點黃經  $\Omega = 260^\circ 36' 36''$  1924年

軌道面の傾斜  $i = 23^\circ 7' 9''$  1924年

離心角  $\phi = 21^\circ 57' 47''$

毎日の平均運動  $n = 472''.951$

週期  $P = 7.52224$  年

週期から見るに全く木星族の彗星である。そして一九三六年頃には木星に著しく近接するといふ。

此の星は發見當時から十六七等級といふ微光星であるため、強力寫眞鏡によらなければ觀測は困難である。

因に、ナルフ氏は一八八四年に一箇の短週期彗星を發見し、其の後、今までに數回歸來し、可なり有名になつてゐる。今回のナルフ氏の第二週期彗星と言ふべきものである

### ●京都大學天文臺の新館と落成

京都大學では、昨年來、天文臺内に二棟のコンクリート建築を建てゝゐたが、近く、ほゞ完成した。二棟は假りに南館及び北館と呼んでゐる。南館は階上を教授室及び講義室とし階下は主に圖書室として可なりゆつたりした幾つかの室數を持つてゐる。又、屋上には、かの十時のブラシニア反射鏡が寫眞裝置として据ゑ付けられてゐる。

北館は、階上にも階下にも、教授室や實驗室が多く區切られ、地下には時計用の地下室屋上には直徑三十尺の大ドームが聳えてゐる總じて此の北館は天文觀測上の實際を主とした建物で、暗室や廢室の準備も整つてゐる。

天文臺内の此の新築と共に、子午儀室は北館の東北に移され、又、従前の「星學實驗室」は七吋赤道儀室の南側に移された。其の他、

四時赤道儀や、太陽鏡も少しづつ、元の位置を變へた。只、星學研究室と呼ばれる恩賜館だけは元の所にあつて動かない。

落成を祝ふため、近い内に何等かの催うしがあつた筈であるが、其れまでには新しい太陽分光寫眞機や、十三時反射鏡も到着するであらうから、其の節には臺内は一段と賑はしさを増すであらう。

### ●ロス氏の新任

ロス(E. E. Ross)氏は、元來の天文學者でありながら、久しく米國ロチェスター(Rochester, N. Y.)市のイーストマン・コダック(Eastman Kodak)寫眞會社で寫眞術を研究してゐたのが、昨年末、ヤーキース(Yorkes)天文臺長フロスト(E. F. Frost)氏の招きに應じて、故バーナード(E. E. Barnard)氏のあとを、實測天文學教授の任を受ける事となつた。しかし、バーナードのやつてゐた觀測の内、四十吋望遠鏡による天體の測微觀測は既に同所のダン・ブリスブルク(Van Biesbroeck)教授がやつてゐるから、ロス氏は主として十吋のブルース寫眞儀を運用する筈。

### ●新彗星續々發見さる

天界の前號に報じた通り、去る三月二十七

日、コペンハーゲンの天文電報中央局長ストロエムグレン(E. Sturgen)氏から今年の最初の彗星(1935)新發見を報じた電報が、京都大學天文臺に到着した。之れは、シャイン(Schajn)氏が發見したものを、ハムブルグ・ベルゲドルフ(Hamburg-Bergedorf)の天文臺長シヨア(Schörr)氏が觀測したので、其の位置は三月二十三日二三時二四・六分(ベルゲドルフ常用時)

赤經一小時四七分四八・九秒 毎日

西へ二分

赤緯北一度四三分四九秒

同

北へ五分

光度十一等

さいふのであるから、當時は乙女座のベ星近傍を獅子座の方へ動いてゐたわけである。

右と同じ三月二十七日夕刻、又、第二の彗星(1935)發見電報が到着した。それに據れば

リード(Reid)彗星

光度八等

三月二十四日二時三三・〇分(グリニ

キチ常用時)

赤經十三時二九分四七・〇秒

毎日

西へ四十八秒

一一一

赤緯南二十度一六分〇秒

同

南へ十五分

更に、近く、四月八日、第三の新彗星(1935)の發見電報が到着した。それによる彗星、オルキス(Orkus)氏が發見

光度 八等

四月五日二時五二・七分(グリニキチ常用時)

赤經二二時二六分四五・一秒

赤緯北一六度三七分一九秒

毎日

北へ一度

右の三つの彗星のうち、第二の、リード彗星は三月二十七日の夜、京都大學天文臺に於いて山本、伊藤兩氏が見、折りから來訪中の水野千里氏も見た。空は好くながつたにも拘らず彗星は可なり明るく、光輝は中央部が特に著した。同夜はシャイン彗星は曇天で見えなかつた。

其の後、生憎、空は曇り勝ち、又、近頃は晴れても、月が明るいため、彗星の觀察には大困難で、今日までに、オルキス彗星も見届けられない。大學の觀測者たちは、月と雲の去る日を早かれと待ちわびてゐる。(四月十一日)